はじめに

非被爆者＝非体験者である高校生が、被爆者＝体験者の話を聞いて、その被爆体験を絵に描いていく。そんな取り組みが広島の高校でおこなわれており、細々と一三年間続いている。[1] 二〇〇七年から広島市立基町高等学校創造表現コースで始まった取り組みだ。『次世代と描く原爆の絵』プロジェクト」という。

広島平和記念資料館（原爆資料館）の毎年の依頼に応じて、被爆体験証言者の証言に出てくる場面を、高校生たちが半年から一年という時間をかけて描く。美術部の活動として課外時間にボランタリーにおこなわれる大変な作業であるが、毎年、依頼場面数以上の希望者（絵を描きたいと立候補する高校生）が集まる。絵を描くことに決まった高校生たちは、担当することになった被爆者（証言者）と六度、七度、多いときは二〇回以上、何度も回を重ねて会い、じっくり話を聞きながら絵を描いていく。そして完成した絵は、その被爆者の証言に使われるのである。

絵を描く高校生にとって、この作業は精神的にそうとうしんどいことである。体験したことも見たこともないことを想像し、被爆者の気持ちになって考え、自らの作画意識を相対化しながら描いていかなければならない。しかもそこで描くのは、想像を絶する悲惨な体験である。何度も筆が止まり、描きなおし、夜うなされながら、泣きながら描いたという高校生もいる。それでも途中で脱落する生徒はいない。この取り組みを初年度から指導している橋本一貫教諭は、最初に「とてもつらい体験を事細かに聞かないといけない。それでも耐えられるか」という覚悟を生徒に問う。「やり始めた以上は、ここでやめるとあなただけの問題ではなくて、証言者の方がショックを受けられるよ。途中でやめるのは絶対許さないよ」と。高校生たちは「それでも描きたい」と思う（小倉、二〇一三）。

なぜなのだろうか。非被爆者である高校生が被爆者の被爆体験を絵に描く経験とは、いったいどんな経

験なのだろうか。

一、問題意識と出会い

私がこの基町高校の原爆の絵の取り組みに出会うにいたった問題意識は、大きくふたつあった。そして両者は、深いところでつながっている。

ひとつは、言うまでもなく被爆体験の風化という問題である。ただし、ここに言う風化には、もちろん存命被爆者の高齢化によって、直接体験を伝えられる被爆者がいなくなり、原爆の記憶が薄れていくのではないかという危機感がまずある。しかし、それだけではなく（それよりもむしろ）、被爆体験がこれまで呼び起こしてきた様々な意味や警告やスローガンの「凡庸化・陳腐化」（Yoneyama, 1999=2005, p.viii）という局面が大きい（小倉、二〇一三）。すなわち、「『核廃絶』『平和の尊さ』『和解』といった『ヒロシマ』にまつわる常套句」が「行政化され、儀礼的にくりかえし唱えられることで形骸化し」ていくことであり、そのことによって「人を揺り動かす力を失ってゆく」ことへの危機感である（Yoneyama, 同上）。

ここからは、非被爆者＝非体験者が被爆体験を切実感をともなった自分の問題として、いわば「生きられる経験」の地平（小倉、二〇一四）でいかに受けとめていけるのか、ということとともに、そもそもそこで自明の前提となっている「継承」とはなにか、なにを、なぜ、なんのために継承するのか、また、証言から伝承への転換期に、どのように過去を知り、なにをどう伝えていくのか、さらには、伝承だからこそ伝えられること、伝承だからこその意味や価値（その生成性・創造性）があるのではないか、といった問題意識が派生していく（小倉、二〇一三：二〇一七a：二〇一八a）。

そしてもうひとつは、このような問題意識の「原問題」ともいうべき私自身のトラウマ的な感情に関わ

る問題があった（小倉、二〇一五：二〇二〇b）。私は五歳のとき、祖母と母に手を引かれ、初めて原爆資料館に行った。熱線で焼けただれ、顔も体もグチャグチャになって死んでいった人たちの写真がそこにはあった。母は「あんたのひいお祖父ちゃんも、こんなふうに死んでいったんよ」と言った。私はその夜から灯りを消して眠れなくなった。そしてそのような感情を四〇年間持ちつづけることになる。

それは、今流行りの言葉で言えば「トラウマ」と称され、忌み嫌うべき感情だとされるのだろうが、私は不思議とそうは思わなかった。この感情にはなにか人間的な、社会的な意味があるはずだという気がしてならなかった。被爆体験の継承という意味でも、もっと肯定的に受けとめてよいのではないかと。しかし、その感情と正面から向きあうことは、なかなかできなかった。大人になって、紆余曲折のすえに社会学という学問の道に進み、このテーマで研究したいと思っても、ずっと向きあうことができなかった。やはり怖かったのである。

いずれも、非被爆者にとっての〈原爆という経験〉[2]とはなにか、その人間的・社会的意味に関わる問題である。このような問題意識が交錯するなかで、基町高校の原爆の絵と出会ったのだった。最初に出会ったのは「焼けた赤ん坊と母親」と題された絵だった（二〇〇九年度制作、図1）。被爆して全身真っ赤に火傷した母親が、やはり被爆して黒焦げになって死んだ自分の赤ん坊を抱いて、気がおかしくなったように天を仰ぎながら言葉にならないうめき声をあげて徘徊している場面を、高校二年生が描いた絵だった。その絵を見たとき、上述した五歳のときに原爆資料館で抱いた感情と同じ衝撃が走ったのである。そしてその絵を使って被爆証言をしていた被爆者（後述の梶本淑子さん）との出会いがあった。

絵を描いてもらった被爆者たちは、「この絵を見るとね、昨日のことのように感じるんです」「あのときの血のにおいまでするような」「私の気持ちが伊藤さん（自分の絵を描いてくれた高校生の名前）に乗り移って、伊藤さんの心が私の心になって、共感してもろうた。そのように感じる」と話す。そして、「もしこ

の場面を正確に写した写真があったとしたら、絵とどちらがいいですか」[3]という私の問いかけに、どの被爆者も迷いなく「絵がいい」と言う。

原爆を体験したことも見たこともない高校生が、なぜこのような絵を描けるのか。それを知りたい一心で、絵を描いた高校生たちを、絵を描いてもらった被爆者を、見守り指導している先生を、そして卒業生を追いかけた。絵を描いていくなかで被爆者とどのような相互行為があり、どんな思いでこの絵を描いているのか。そこにはどのようなものの見方・感じ方・考え方の変化があるのか。原爆の絵を描く経験は、高校生の人生にどんな意味をもたらすのか。そして、いったいなにを継承しているのか。そんなことを聞いてきた。絵を描く前、デッサンを描き構成を決めつつあるとき、色が入り始めたとき、そして完成したときと、原爆の絵を描きあげるまでの経験的プロセスをずっと追った年もある。

高校生たちは、「話すことが苦手なので……」と言いながら、とつとつと、だが自らの経験を確かめるように語ってくれた。しゃべることが苦手だから絵を描いている、だから大したことは話せませんと遠慮がちな彼ら彼女らの口から出てくる言葉は、予想を超えるものだった。自らの身体を通したオリジナルな言葉が、等身大の言葉でありながらそれまでの自分の枠を超え出ていくような言葉が、その奥底から引き出されてくるのである。次節から見ていこう。[4]

二、……どんな営みなのか

栩田　最初に、下絵のときに人描いて、赤い絵の具塗っちゃったときに、ものすごい気持ち悪さが襲ってきて。

――うん。ど…どんな感じ？

図1 「焼けた赤ん坊と母親」
作●平野弘美　証言●梶本淑子
広島平和記念資料館所蔵

原爆によって崩壊した町を、黒焦げに火傷して死んだ赤ちゃんを抱いてワウワウワウワウ狂ったように叫びながらグルグルと徘徊する母親と、もげた片腕を抱えてひざまずいて死んでいった中学生。証言者の梶本さんは14歳（高等女学校3年生）のとき、学徒動員先の工場で被爆し、崩壊した建物の下敷きとなったが、友だちと声をかけあい助けあって必死に這い出た。這い出たさきに遭遇した人たちの姿である。

※以下、ここに添える原爆の絵の説明は、基町高校が絵の展覧用に作成した作品解説文、絵を描いた基町高生と絵を描いてもらった被爆者への筆者（小倉）によるインタビュー、絵を描いた基町高生がその年の展覧会でおこなったギャラリートーク、被爆者の証言記録等を適宜参照・引用しながら筆者がまとめたものであり、文責はすべて筆者にある。

油彩画（F15号）

栩田　なんか＊＊こむっていうか、そこでやっとなんかいろいろ受け入れた感じなんです。

――　いろいろって？

栩田　なんか資料館の人形（リニューアル前の広島平和記念資料館本館に展示されていた被爆再現人形）とか見て、あの、あぁなんかこういうふうに火傷して、こういうふうに悲惨な状況になってたんだなっていうのが、たぶんあの、ぼんやり…見るだけだと、たぶんぼんやり理解してただけで。

――　そうだね。ぼんやりだよね。

栩田　描いて初めて、あっ、こういうことだったんだって。

――　あぁ…え、こういうことってどういうことなの？　言葉にするのは難しいと思うんだけどさ。

栩田　とりあえずあの、人間を塗る色じゃなかった気持ち悪さとか。〔中略〕なんか描いてみて、下絵描いたのが深夜だったんですけど、前にして寝れなくなっちゃって。

――　そうでしょう。

栩田　それでそのまま朝まで、こう、うつらうつらはしながらなんですけど、しんどかった。やっぱり最初、赤で塗っちゃったとき、あぁっ、赤なんだっていうか、これ、いま絵の具で塗ったけど、これ血とか、その人間の皮膚なんだなっていうことがわりと受け入れられなかったというか、受け入れざるをえなくって、ちょっとしんどかったです。

（小倉、二〇一七a、四九頁）

この語りは、ちょうど下絵に色を入れ始めた頃、基町高校のアトリエで自分のその描きかけの絵（図2-2）を前にして、栩田優希さん（制作開始時高校二年[5]、二〇一四年度制作、図2-1）が話してくれたものである。色を塗りだした瞬間、思ってもみない感情が生起してくる。ここには、被爆者の原爆の記憶が、感情をともなった高校生自身の経験として刻み込まれていくプロセスが端的にあらわれている。そのプロセスには、どのような営為があるのだろうか[6]。

追体験

山﨑菜結さん（制作開始時高校二年、二〇一四年度制作、図3）は、担当した被爆者である白石多美子さんの話を聞いたときに自分が最も衝撃を受けた場面を描いた。その衝撃について、こう話す。

山﨑　その、焼死体を、白石さんが、首をまたいだときが、ほんとに衝撃だったっていうの…もう目の前で初めて聞いたんで、もうほんとに、なんか言葉にならない感じ…もうウワンでもなくて、なんか、こうブワァッて、

――　ブワァッて。

山﨑　くる感じで。それをなんとか、絵で出せたらなっていう感じでした。

山﨑さんは、「その場所に自分がなんかこう、その情景を見てるというか、なんかそういう感覚があるんで」と言う。小倉（二〇一三）でも指摘したとおり、この取り組みのなかで高校生たちは、大なり小なり「追体験」をする。

津村果奈さん（制作開始時高校一年、二〇一四年度制作、図4）は、もともと目の前にある静物画を好んで描いているような生徒だった。原爆の絵の下絵を描いていた時期に話を聞いたときは「けがの写真とかそういうのを、今まではあんまり見たくなかったので」と言っていた彼女に、絵を描き終わったときの心境の変化を尋ねたところ、彼女はこう述べている。